

ノンフィルムの森② シネマテーク・フランセーズ(下)

岡田 秀則
Hidenori Okada

連載:
フィルム・アーカイブ
の諸問題
第69回

承前

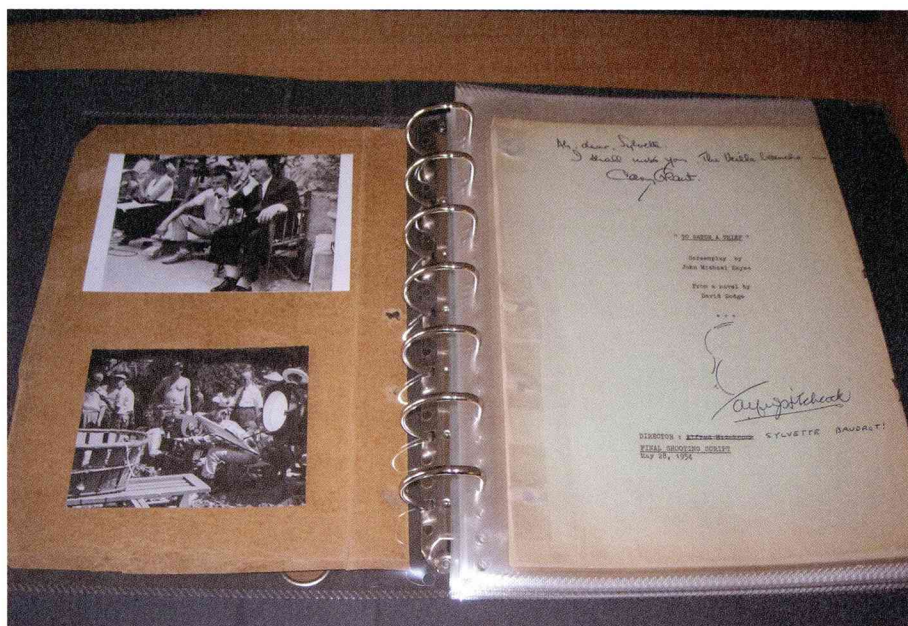
図書室—実用主義の誇り

シネマテーク・フランセーズのコレクション収集の現場を廻って、筆者がはつきり感じ取れたのはシネマテークが必ずしも「網羅する」保存所ではないという点である。伝説的なラングロワの収集への情熱は、シネマテークの収集活動が、網羅的であるかのようについ想像力を羽ばたかせてしまう。だが、そもそも法定納付制度による保存機関も、フィルムはCNCフィルム・アーカイブ、関連図書やポスターなどは国立図書館であり、アソシエーション組織であるシネマテークはいかなる資料の納付先でもない。むしろシネマテークは今も昔も「普及」の拠点であり、それは例えば、「上映企画に使われるフィルムのうち所蔵フィルムは40%以下」と上映部門のベテラン、アルベルト・デル・ファブロ氏があっさり語った通りである。シネマテークのコレクションはフィルムもノンフィルムも莫大ではあるが、やはり普及に重心を置いた選別的なアーカイブである。「誰でも気軽に利用できる」を追求すればコレクションは早く傷み、かといってあまり保存に重きを置けば世間から遠ざかってしまう。ものを保存するすべての場所につきまとうこのジレンマから、シネマテークがかなり自由な運営ができるのは、要は国内の映画機関が役割を分担しているからである。その普及活動も、外部機関のコレクションの豊かさに支えられている。

そして、そのポリシーをノンフィルムの分野でもっともはつきり表現したのが図書室であろう。書籍・雑誌ともにすべて開架を原則としているが、その代わり来館者の使用頻度の高そうな一般書(約21,000冊、分類法は国内の諸シネ

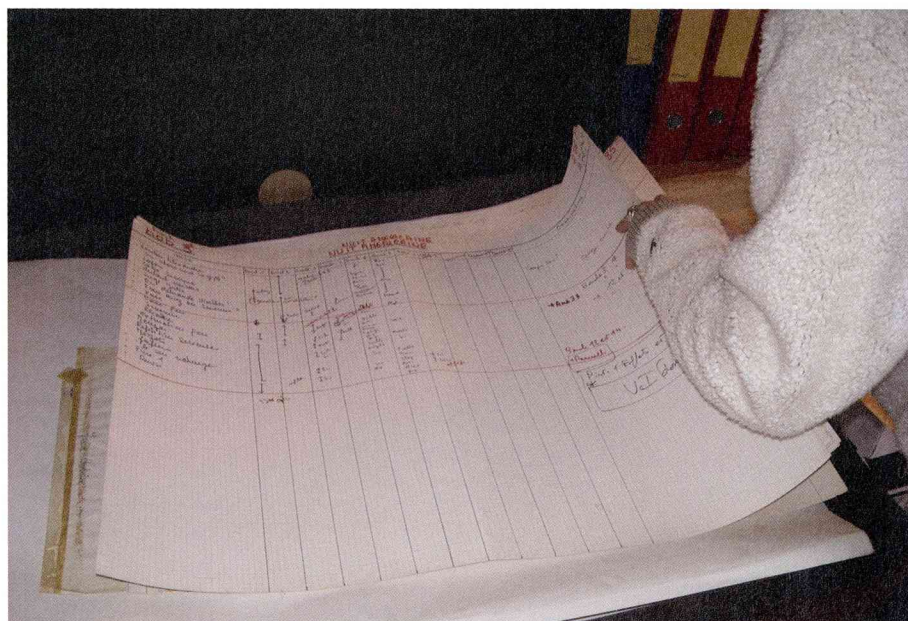
マテークと共同考案)に所蔵を限定したシネマテークの図書室には、稀観書を集めようとする方向性はあまりない。これは、日本で発行された映画刊行物の網羅的収集を志向し、閉架を原則とする代わりに貴重書も即座に閲覧できるフィルムセンターの図書室とは対照的だ。その結果、批評や映画史にまつわる一般書がずらりと並ぶことになるが、それもフランスの映画研究の事情には即しているのだろう。図

書室の利用は登録制ではあるものの、「最終保存所」を標榜しない以上、コピーサービスの複写機を扱うのは利用者だし、DVDやVHSビデオ(約6,500タイトル)で映画を楽しめるブースを22席も設置してしまうなど、とことん“割り切った”運営が可能である。歴史的にも、図書室はBiFiの設立以前のシネマテークから存在しているわけで、このような位置づけもいわば必然なのである。



『泥棒成金』修復済みシナリオ

名スクリプター、シルヴェット・ボドロの旧蔵品。監督名をボドロと直したアルフレッド・ヒッチコック監督のいたずら書きが見える。ページごとに分離し、さらに貼付資料も分離してファイリングするのが適切な処置とされている。



『アメリカの夜』ミキシング表

映画の撮影現場をめぐるフランソワ・トリュフォー監督の作品だが、その「映画内映画」の部分のミキシング表。

年間の利用者は、ビデオブースの人気もあって延べ約25,000人。また遠隔地の利用者でも図書室資料にアクセスできるよう、遠隔地向けの電話対応職員をおいているのも、他では見られない独自のサービスである。

そして、この図書室の事業をダイレクトに支えている部署が印刷部・視聴覚室である。書籍・雑誌・映画祭カタログを扱うのはもちろん、学生の論文・VHSとDVDビデオなども専門機関を通じて購入し、さらにウェブマガジンやウェブ上のデータベースまで登録料を払って閲覧に供している。書籍の選定にあたっては、シネマテーク館内書店の仕入れも念頭に入れて、書店との討議を経て購入リストを策定する。現在は約80%がフランスの書籍、20%が他の欧米の書籍(英・米・伊・西・独・ベルギー)となっているが、注目すべきは、それ以外の国々の書籍を一切受け入れないことである。もちろん日本語の書籍も対象外、という割り切り方だ。

雑誌については、現在講読中のものが125誌、過去の雑誌も含めて436種類を所蔵している。そのすべての雑誌の特色がシネマテークのサイト内で紹介され、近年は、損傷した初期雑誌については修復にも着手している。また、ウィル・デイ旧蔵の光学技術関連書籍など、著作権切れの貴重書120冊(1503～1931年に出版されたもの)のデジタル化に着手するなど、映画技術部についてこでも新しいプロジェクトが始動していた。

「イコノテーク」の登場

さて、今回のシネマテーク・フランセーズでの研修の中で、もっとも強く印象づけられたのが、「イコノテーク(Iconothèque)」という、フィルム・アーカイブ界でも聞き慣れない名の部署であった。「シネマテーク」という語がシネマ(映画)を集める場所を指すとすれば、ここは

「イコン」つまり“画像”を集める場所ということになる。具体的な“もの”ではなく、“画像”を集めるとはどういう意味なのか。

私たちの世界は、もはや「物がその物自体でしかない」というかつての常識を超え始め、物体はそれ自体であると同時に、「データ」としてそのコンテンツだけを分離することが可能になっている。ノンフィルム資料について具体的に言えば、ポスターはポスター、スチル写真はスチル写真、と形態別に分類すれば終わりではなく、「データ」という水準でそれらを同列に扱うことも求められる。そこで、これまでデジタル化されてきたスチル写真・ポスター・美術デッサンなどを横断的に集積する場所として考案されたのがこの「イコノテーク」である。もちろん、紙媒体であれガラス乾板であれ、オリジナル素材が物質的に保存されていればこそ可能な活動であり、“画像”だけを最終保存媒体と見なす考えはない。

イコノテークは、図書室と階段でつながった4階に受付窓口を持ち、こうした資料画像を外部からの要望に応じて提供すべく、研究・出版・展覧会などの目的別に料金表を定めている(フィルムセンターも展覧会「ドキュメンタリー作家 土本典昭」のために初めてポスター画像を利用した)。ただ、広くヨーロッパではポスターはそのデザイナー、スチル写真は撮影者を法律上の著作権者とみなすため、利用者は申請にあたって著作権のクリアをしなければならない例がほとんどである。そのためイコノテークは権利所有者に関する情報も可能な限り提供し、手続きの円滑化を図っている。

またイコノテークと強いつながりを持っているのが、その蓄積データの大多数をなすスチル写真を管理する写真室である。アルバムなどの「写真文書」を含むあらゆる映画関連の写真を扱い、総数約100万枚のうち、現状では約50万枚がカタログ化されている。物理的には、

封筒入りの紙焼き写真・電子データ・透明ポジタイプ(diapositive)などの素材別に、また「白黒／カラー」「ポジ／ネガ」やフォーマットなどの種別に応じて分類される。また写真その物の目的別に、作品写真であれば「スチル写真・ポートレート・撮影スナップ・フィルムコマ抜き・確認写真(ロケハン写真・美術セット写真など)」の5種、非作品写真であれば「テーマ別(イベント、映画館など)・人物・プレシネマ」などに分類される。撮影者の許可を得て随時紙焼き写真のデジタル化を推進しており、すでに約45,000枚のデジタル化にこぎついているほか、約550冊の所蔵アルバムのうち350冊がカタログ化を済ませている。

ノンフィルム最深部—アーカイブ室

そして、ノンフィルム部門のいわば「奥の院」とも言えるのがアーカイブ室である。管轄する資料は、目的別の分類になじまない映画人・映画団体の個別コレクション(約140種、約15,000ファイル)であるが、アベル・ガンズ、ジャン・エプスタン、フランソワ・トリュフォーといった著名な映画人の残した手書き原稿、製作資料が多数含まれ、フランス映画史の最重要文献が一堂に集まっている感がある*。こうした個々の映画人に由来する資料こそもともとラングロワ的な遺産であり(ということは他の資料と同じく長年放置されていたのだが)、BiFiの成立以降はカタログ化が急ピッチで進められ、フランス国立公文書館の文書取扱法に依拠した文書の修復作業も始まっている。ただし、文書の修復経費が高いのは大きな悩みとなっており、昨年にはその重要性を訴えるPRビデオ『『歴史は女で作られる』を救うシネマテーク・フランセーズ(Cinémathèque française au secours de Lola Montès)』を制作した。フランス映画界屈指のスクリプター、リュシー・リシュティグが残したマックス・オフルス監督の傑



図書室

فران克・O・ゲーリー設計のシネマテークは床面が複雑な形状をしているため、上映ホールを除いて大きな空間がなく、図書室も決して広くはない。



図書室内のビデオブース

毎日開室とともに早々と満席になる。

作の撮影台本を修復してゆく過程を解説するこのビデオを通じて、外部からの資金援助を模索したいと責任者のレジス・ロベール氏は語っている。

こうした資料へのアクセスは図書室では受けず、その上の4階に、専門職員の監視下にある研究者向け閲覧室(Espace Chercheurs)を設けている。この資料は前述の倉庫で保管されているので閲覧希望者は48時間前までに申請しなければならないが、それでもこうした重要文献が手軽に閲覧できるようになった影響は大きく、利用者は年に約1,700人を数えているという。

さて、ここまできて、一つの事実に気づくことになる。シネマテークにはシナリオを組織的に保存する収集する部署がないのである。このアーカイブ室の個人資料の中にシナリオが含まれることもあるが、制度化された収集システムはここには存在しない。

デジタル公開最前線

最後に、2004年に新設されたシネマテークでも若い部署として、オンライン編集課を紹介したい。要するに、映画にまつわるヴァーチャル展覧会をネット上に構築するのが業務であるが、一つの展覧会をウェブ内で開くには、資料の読み込みから始め、テーマや構造を定め、専門会社に委託して完成に至るまでに6か月から1年を要するという。今のところ、平均して年に2サイトを構築しており、最新のものは、リシュティグと双壁をなすスクリプター、シルヴェット・ボドロの資料を用いた「スクリプターの仕事(Le métier du script)」である。資料のさまざまな公開方法を検討すると、例えばこうしたスクリプターの製作資料は、本物の展覧会で展示するには文章量が多いわりに、実物が小さい。かといってリクエスト・ベースでの閲覧のみでは、社会への露出があまりに小さく、要す

るにもつたいない。その意味では、これらはちょうどネット上での公開に適したものと言えよう。従って、シネマテークで開催される「リアル」展覧会とは独立して構想されるのが普通であり(「ドイツ表現主義映画」展のように実際の展覧会のあとに作られたサイトもある)、完成後も新たな資料を付け加えて「進化」できる構造になっている。

かくして、映画資料はこうした無数の形態を持つに至ったが、その公開を支えているのが前にも述べた通り、厳密に構築されたデータベースであることは明かだろう。非フィルム資料保存課の電子ドキュメンテーション室が、内部用データベース「シネドック3」とその発展形である公開データベース「シネ・ル・スールス」を開発したことは前に述べたが、そこでは現在約25万の人物名データ、約74,000の作品データが管理されており、驚いたことには、クレジットに現れるさまざまな映画人データを管理する専門職員も擁している。つまり、約50にわたるジェス・フランコ監督の変名を同一人物として認識し、「クリスチャン・ディオール」という名前のフィルム編集者が著名な衣裳デザイナーと混同されないよう、マニア中のマニアともいえる一人の職員が日々調査を重ねているのである。また、作品データ・物語要約文は業界団体「レ・フィッシュ・デュ・シネマ(Le Fiches du Cinéma)」より購入し、CNCアーカイブとは独立して、いまやもう一つのナショナル・フィルムグラフィを築いた感がある。デジタル化した資料画像は、著作権の規則を逸脱しない範囲で適宜データベースにアップされるほか、新聞・雑誌の映画関連記事の切り抜きをウェブ上で公開、現在までに約2万作品の記事切り抜きが行われている。現在の同室はヨーロッパ各地の映画機関が所蔵する映画フィルムと非フィルム資料を横断的に流通させるためのデジタル・プロジェクト「ヨーロッパ・フィルム・ゲ

ートウェイ(European Film Gateway)」を進めており、デジタル公開の最前線が汎ヨーロッパ的に構築されつつある。

そろそろ、新たな“ノンフィルムの殿堂”のそびえるバリを去る頃だろう。だがその前に、ローラン・マノーニ氏のおすすめで毎年恒例の「映画市」をふらっと訪れてみた。パリ北西にあるアルジャントゥイユ市で毎年1月に開かれているこの「映画狂い」(Les cinglés du Cinéma)なるイベントは、200以上の業者が参加し、映画ポスターやスチル写真はもちろん、映画雑誌や映写機、プレシネマ機材など、映画にまつわるあらゆるグッズが販売される「ノンフィルムの祭典」といえる。この会場を埋め尽くす物量の渦巻きの中で、筆者は、ヨーロッパではノンフィルムは「映画関連資料」という控えめな地位を脱し、一つの文化として確立していることを理解した。映画人資料や美術デッサンが“映画美”の源泉として教授や学生に求められ、ポスターやスチル写真が生活文化として人々の暮らしに溶け込んでいる、そんな環境の中で映画を思考することの贅沢さはやはり日本とは違う。その感触は、次にイタリアへの短い旅の中でも反芻されることになる。

次号に続く

(フィルムセンター主任研究員)

* とはいえ、例えば俳優の個人資料はほとんど所蔵されていない。それは、シネマテークよりも長い歴史を持つ国立図書館が、古くから演劇系の資料を集めてきたからである。フランスでは映画と演劇の両者に出演する俳優が多く、マリア・カザレス、シャルル・ヴァネル、デルフィーヌ・セリグといった大スターたちはしばしば国立図書館(現在の管轄はスペクタクル芸術部)を寄贈先に選んできた。スペクタクル芸術部は音楽資料も対象とするため、モーリス・ジョーベルといった映画音楽の作曲家、イヴ・モンタンのような歌手兼俳優もこちらを選んでいる。さらに、シネマテーク設立(1936年)以前から活躍してきた監督たち、例えばアベル・ガンズ、ルネ・クレール、サシャ・ギトリ、ジャン・グレミヨン、マルク・アレグレがこちらへ資料を寄贈したもの自然に納得されよう。



研究者向け閲覧室
仕切りを低くするなど、貴重な資料を盗まれないための工夫がなされている。



アルジャントゥイユ市の「映画市」会場